

第 24 回
「野生生物と交通」
研究発表会

要 旨 集



主催：一般社団法人 北海道開発技術センター



第24回「野生生物と交通」研究発表会

★日時:2025年2月28日(金)10:00~(開場9:30) ★会場:札幌コンベンションセンター 中ホール

特別講演 10:10-11:10

「野生生物と交通」研究発表会と歩んだ24年:49回の発表を振り返って 柳川久[帯広畜産大学]

★PRタイム11:10-11:25 ★昼食11:25-12:20

オンライン
同時配信!!
詳しくはweb
サイトへ!

第1分科会(緑化・保全) 12:20-13:40

座長:浅利 裕伸[帯広畜産大学]

- 12:20▶12:40 道路事業の環境影響評価における動物、植物、生態系に対する環境保全措置と事後調査の実施状況 ○大河内 恵子、榎垣 友哉、橋本 浩良[国土交通省 国土技術政策総合研究所]
- 12:40▶13:00 横浜横須賀道路金沢支線 能見堂トンネル上部の植生復元に関する報告 築瀬 知史[東日本高速道路(株) 関東支社]、仁藤 健、○大井 美穂[東日本高速道路(株) 関東支社 横浜工事事務所]
- 13:00▶13:20 エゾシカの食害等を受ける環境下での植栽樹木の生育状況—実施後10年間の状況— ○榎澤 肇、阿部 正明[(一社)北海道開発技術センター]
- 13:20▶13:40 全国の道路事業における動物の移動経路の確保を目的とした環境保全措置の傾向 ○榎垣 友哉[国土交通省 国土技術政策総合研究所]、上野 裕介[石川県立大学/国土交通省 国土技術政策総合研究所]、大河内 恵子、橋本 浩良[国土交通省 国土技術政策総合研究所]

休憩 13:40-13:50

第2分科会(鳥類) 13:50-14:50

座長:佐藤 真人[(一社)北海道開発技術センター]

- 13:50▶14:10 自動車のハイビーム点灯によるヤンバルクイナの交通事故削減数の推計—事故多発期間における沖縄県道2号線を対象として— ○笠木 一樹[日本大学大学院]、濱中 佑月、伊東 英幸、末次 優花[日本大学]、向 真一郎、黒田 ゆうび[NPO法人 どうぶつたちの病院沖縄]
- 14:10▶14:30 天然記念物シマフクロウ(*Ketupa blakistoni*)を対象とした防鳥柵の配色検討 ○中村 結喜、土門 優介、石塚 正仁[(株)ドーコン] 藤野 戸宏樹[北海道開発局 釧路開発建設部]
- 14:30▶14:50 高周波を用いた空港におけるバードストライクの抑止効果 ○辻 維周[岡山理科大学 研究社会連携機構]、轟 秀明[(有)T.M.works]

コーヒーブレイク 14:50-15:20

第3分科会(対策・活用) 15:20-16:20

座長:志村 稔[(株)テス]

- 15:20▶15:40 鉄道運行の実環境下で鳥獣忌避剤の対鹿衝突防止効果に関する研究 ○LAI, LAP CHAI, 霜野 慧亮、石井 響弥、横溝 英明、須田 義大[東京大学生産技術研究所] 飯島 徹、畑山 稔、増井 克至、藤田 晃弘[WILLER TRAINS(株)]
- 15:40▶16:00 ダイナミック全搬送波単側波帯変調による超指向性音に対するニホンジカの反応調査 ○松崎 博季[北海道科学大学]
- 16:00▶16:20 クマの人的被害と国産ジビエ認証の必要性 ○押田 敏雄[麻布大学]、上 薫 薫[静岡県立農林環境専門職大学]

休憩 16:20-16:30

第4分科会(ロードキル) 16:30-17:30

座長:大江 祐一[国土交通省北海道開発局]

- 16:30▶16:50 個体群動態指標としての長期ロードキルデータの有効性—タヌキを事例として— ○荒井 菜花、浅利 裕伸、柳川 久[帯広畜産大学]
- 16:50▶17:10 エゾシカのロードキル対策におけるDX活用とオープンデータ化の可能性 ○佐藤 金八、佐藤 真人、大井 元輝、鹿野 たか嶺[(一社)北海道開発技術センター]
- 17:10▶17:30 視線追跡技術を用いた運転中のドライバーの視点から推測されるロードキルの発生メカニズムについて ○立木 増之[酪農学園大学]

休憩 17:30-18:00 懇親会 18:00-20:00

パネル
展示

■動物侵入対策立入防止柵[(株)日本パーツセンター札幌支店] ■アーク放電を利用したクズ防草システム[(株)日本パーツセンター札幌支店] ■IoT自動撮影カメラとAI搭載クラウド[(株)ハイク] ■ヒトデ由来マリン・サポニン採用!シカ忌避テープDeerBlock[ハーテック・バイオセクター(株)] ■害獣侵入防止装置「わたれません」、「わたれませんLIGHT」[(株)赤城商会] ■「ロードキルの学習」による根室地域学習の取り組み—だれにとっても、安全安心な根室の道を目指して—[釧路根室みち学習検討会・根室ワーキング、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム、釧路開発建設部道路計画課] ■シン6次産業[長野県上伊那農業高等学校] ■「野生生物と社会」学会の紹介[「野生生物と社会」学会] ■シーニックバイウェイ北海道の活動紹介[(一社)シーニックバイウェイ支援センター]

懇親会
のご案内

日時:2月28日(金)18:00~20:00
場所:レストランSORA(札幌コンベンションセンター内)
会費:5,000円 申込締切:2月14日(金)
申込:右下のQRコードからお申込みください

会場:札幌コンベンションセンター

札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1



【お問合せ】(一社)北海道開発技術センター内「野生生物と交通」研究発表会係
(担当:向井・鹿野) 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2-17 セントラル札幌ビル3F

●電話:011-738-3364 ●FAX:011-738-1890
●E-mail: wildlife@decnet.or.jp ●Web: https://www.wildlife-traffic.jp/

聴講・懇親会申し込み!
(2月14日[金]まで)

●主催:(一社)北海道開発技術センター ●共催:(一社)エゾシカ協会、(公財)北海道環境財団、アニマルパスウェイ研究会、道路生態研究会、(一社)シーニックバイウェイ支援センター ●協力:エコネットワーク ●後援:国土交通省北海道開発局、国土交通省北海道運輸局、北海道、東日本高速道路(株)北海道支社、北海道旅客鉄道(株)、帯広畜産大学、「野生生物と社会」学会、(一社)日本福祉のまちづくり学会北海道支部



recycled paper

【特別講演】

「野生生物と交通」研究発表会と歩んだ24年：49回の発表を振り返って

○柳川 久¹

(帯広畜産大学¹)

第1回「野生生物と交通」研究発表会の2002(平成14)年から今回の第24回まで、大学の管理職にあった数年の回(15、16、17、19回)を除き、ほぼ毎回のように発表の場を与えていただき、振り返って数えてみたら49回の発表を行ってきました。

これらの発表をいくつかのジャンルに分けつつ、年代を追いながら振り返っていきたいと思います。ちなみに49回の発表を対象動物やジャンルによって分類したところ、最も発表数が多かった動物の分類群はコウモリ(10回)でした。次がエゾシカで8回、モモンガ5回、タカ類などの猛禽類5回、バードハウス(巣箱)4回、ヒグマ2回、あとはエゾリス、ナキウサギ、タヌキとキツネ、カエルが各1回という結果でした。

これまでの「野生生物と交通」研究発表会の主流を代表するような歴史ではないですが、私なりの四半世紀の歴史を、ある程度時間軸で順を追いながら紹介させていただきます。

【論文発表】

道路事業の環境影響評価における 動物、植物、生態系に対する環境保全措置と事後調査の実施状況

○大河内 恵子¹・檜垣 友哉¹・橋本 浩良¹

(国土交通省国土技術政策総合研究所¹)

規模の大きい道路事業については、環境影響評価の手続きを行うことが法律で定められている。予測・評価の結果、環境影響を受けるおそれがある場合は、環境保全措置・事後調査を検討する必要がある。最新の科学的知見を用いた客観的かつ効率的な環境影響評価の実施を支援するため、本稿では、法律に基づく道路事業の環境影響評価において、評価書の記載内容を基に、動物、植物、生態系に関する環境保全措置及び事後調査の実施状況について整理した。

その結果、環境保全措置の採用状況や事後調査の計画割合の傾向を把握し、事業者により多様な取り組みが行われていることが明らかになった。引き続き、環境保全措置と事後調査の実施状況を確認するとともに、環境保全の取り組みの効果検証や環境影響評価の実施支援につながる知見の蓄積が必要と考えられる。

横浜横須賀道路金沢支線 能見堂トンネル上部の植生復元に関する報告

築瀬 知史¹・仁藤 健²・○大井 美穂²

(東日本高速道路株式会社 関東支社¹・

東日本高速道路株式会社 関東支社 横浜工事事務所²)

東日本高速道路株式会社が管理する神奈川県内に位置する横浜横須賀道路金沢支線には、既存の山を開削して構築した能見堂トンネルという構造物がある。開削された既存の山は、横浜市の指定する特別緑地保全地区と隣接しており、それらと一体となった緑地としてハイキングルートが整備され、地域住民の重要な自然環境資源となっていた。

当該トンネルの施工にあたり、地元住民や横浜市と協議を重ね、元の自然環境を保全するための取組がなされた。その内容として、開削される2万㎡の斜面を元通りに復旧すること、地域の植生になじむ樹木が使用されること等があげられる。トンネル工事では復旧する斜面の地形ごとにトンネル断面を7断面に分けるなどの工夫で対応した。

現在、供用後30年以上経過したが、現地では順調な植生遷移が見られ、景観などマクロ的にはほぼ復元されたと言える。高速道路事業における、施工時の取組が奏功し大規模な植生復元がなされた貴重な事例として報告するものである。

エゾシカの食害等を受ける環境下での植栽樹木の生育状況

—実施後 10 年間の状況—

○檜澤 肇¹・阿部 正明¹

(一般社団法人北海道開発技術センター¹)

北海道十勝管内の十勝三股地区では、樹木を用いた植生復元の取組みが進められている。本稿では、エゾシカの食害等を受ける環境下で植生復元のために植栽した樹木の、植栽後10年間の経年的な生育状況の観察結果と観察結果の活用例を報告する。

平成23年(2011年)の植栽後10年間に経過した令和3年(2021年)に実施した調査では、当初植栽本数143本に対し、合計43本(針葉樹22本、広葉樹21本)の生育を確認し、生存率は30.1%であった。また10年間で平均樹高は広葉樹が2.83~3.17m増加、針葉樹は0.45~0.75mの増加となった。エゾシカの食害防止柵を設置した場合の樹木の生存率は58.3%となり、設置しない場合(9.6%)に比べて5倍以上向上することもわかった。

これら10年間の観察結果等については、現在も継続している植樹イベントの参加者への解説素材等として活用するための検討も行った。

全国の道路事業における動物の移動経路の確保を目的とした環境保全措置の傾向

○檜垣 友哉¹・上野 裕介^{1,2}・大河内 恵子¹・橋本 浩良¹
(国土交通省国土技術政策総合研究所¹・石川県立大学²)

線状のインフラである道路は、動植物の生息・生育環境を分断し、陸上動物の移動障壁となるリスクを伴う。そのため、我が国の直轄道路事業において、陸上動物に対する移動経路の確保を目的とした環境保全措置が多く実施されている。本研究では、直轄道路事業における動植物に対する環境保全措置のうち、動物の移動経路の確保の手法に着目し、それぞれの実施状況を整理することで、傾向を把握した。その結果、行動範囲が広く移動能力の高い哺乳類等に対する「カルバートの設置」、移動能力が低い両生類等に対する「側溝・集水桝等の構造検討」が多く実施されていることがわかった。さらに、各動物の生態特性に応じた多様な取り組みが、道路事業者によって実施されていた。今後、より詳細な分析を行い、有用な知見を抽出することで、環境保全技術の高度化・効率化が図られると期待される。

自動車のハイビーム点灯によるヤンバルクイナの交通事故削減数の推計 — 事故多発期間における沖縄県道 2 号線を対象として —

○笠木 一樹¹・濱中 佑月²・伊東 英幸²・末次 優花²・向 真一郎³・黒田 ゆうび³
(日本大学大学院¹・日本大学²・NPO 法人どうぶつたちの病院沖縄³)

沖縄島北部森林域(やんばる)ではヤンバルクイナの交通事故が多発しており、これまでに警戒標識やクイナトンネルなど様々な対策が行われているが、現在も交通事故は多発しており、更なる事故対策が求められている。これに対し著者の先行研究では、簡便かつあまりコストのかからない新たな事故対策として、ヤンバルクイナの活動が活発となる早朝に自動車のハイビームを点灯して走行した場合に道路への出現を未然に防止できる可能性を示した。しかし、ドライバーがハイビームを点灯することによって、どの程度の事故件数を削減できるかについては推計されていない。そこで本研究では、道路 1km あたりの事故件数が最も多い沖縄県道 2 号線の 0kp~12kp を対象とし、2022 年~2024 年の事故多発期間(4 月~8 月)におけるハイビーム点灯時の交通事故件数を推計し、実際の事故件数と比較することで交通事故削減数を推計した。

天然記念物シマフクロウ (*Ketupa blakistoni*) を対象とした 防鳥柵の配色検討

○中村 紘喜¹・土門 優介¹・石塚 正仁¹・藤野戸 宏樹²
(株式会社ドーコン¹・北海道開発局 釧路開発建設部²)

天然記念物シマフクロウ(*Ketupa blakistoni*)はその希少性の高さから、北海道内の道路事業において、特に保全効果の高い環境保全措置(ロードキル対策の防鳥柵)が求められる。しかし、本種を対象とした防鳥柵の構造は統一されたガイドラインや規格がなく、事業区間毎に構造を検討している。そこで、防鳥柵の効果をより向上させることを目的に防鳥柵の構造を検討したが、本種の色覚を考慮した視認性の高い支柱間ワイヤーの配色が不明であった。そこで、施工性や周辺環境を想定した背景色とワイヤー候補色のコントラスト比較による、保全効果の高い支柱間ワイヤー配色を検討した。その結果、非積雪期の背景(深緑(針葉樹林)及び緑(広葉樹林))では黄の視認性及び施工性が、積雪期の背景(白(雪)及び薄いグレー(落葉したシラカンバ林))では黒の視認性及び施工性が相対的に高いと評価された。加えて、施工後の順応的管理につながる環境保全措置実施の全体計画を整理した。

高周波を用いた空港におけるバードストライクの抑止効果

○辻 維周¹・轟 秀明²
(岡山理科大学研究社会連携機構¹・有限会社 T.M.woks²)

全世界の空港で起こっているバードストライクは、航空機機体やエンジン損傷を招き、それに起因する遅延・欠航により航空会社や利用者の多大な経済的な損失を招いている。また各空港では爆音機やバードスイープなどを行い、その都度鳥を追い払っているがなかなか効果が出ていないのが現状である。そこで我々は鳥の種類に応じて嫌う周波数を割り出し、それをスピーカーで発することにより音のバリアを張り、寄せ付けない装置「バードソニック」を開発した。バードソニックは関西3空港をはじめとして現在9空港に設置されているが、それなりの効果が発現している。今回はその現状と課題を各空港よりピックアップした効果を踏まえながら検討していきたい。

鉄道運行の実環境下で鳥獣忌避剤の対鹿衝突防止効果に関する研究

○黎 立齊¹・霜野 慧亮¹・石井 響弥¹・横溝 英明¹・須田 義大¹・

飯島 徹²・畑山 穰²・増井 克至²・藤田 晃弘²

(東京大学生産技術研究所¹・WILLER TRAINS 株式会社²)

本研究は、鉄道におけるシカとの衝突問題を軽減することを目的として、光学的忌避剤であるマリンサポニンを用いた対策を提案し、実証実験を実施した。本提案では、鉄道車両にマリンサポニンを活用した光学的対策を取り付けることで、インフラに過度に依存しない新たな方法を示した。実験では、車両に搭載されたオンボードカメラによってシカの行動映像を記録し、機械学習を用いた画像認識アルゴリズムを開発することで、シカの行動パターンを類型化した。特に、マリンサポニンの有無がシカの鉄道車両に対する行動に与える影響を調査し、80 頭以上のシカ行動を分類することに成功した。本研究により、動物行動の詳細な把握が可能となり、動物衝突問題の解決に向けた今後の研究への貢献が期待される。

ダイナミック全搬送波単側波帯変調による 超指向性音に対するニホンジカの反応調査

○松崎 博季¹

(北海道科学大学¹)

本稿では、搬送波の振幅を可聴音の振幅包絡に応じて変動させるダイナミックキャリア変調方式を適用した全搬送波単側波帯変調による超音波発振子100個からなるパラメトリックスピーカから再生される超指向性音の音響測定を行なった結果と超指向性音に対する野生のニホンジカの反応調査を行なった結果について報告する。音響測定結果より、スピーカ近傍の横方向には音がほとんど伝搬しないものの、スピーカからの距離が離れるに従って、音量が小さくなりながら横方向に広がり、周波数によっては約200mまで伝播することが確認された。ニホンジカの反応調査結果より、ダイナミックキャリア変調方式を適用した超指向性音でもニホンジカが反応を示し、特に2～4kHzに音の主成分や基音がある音に対して強い反応を示した。本スピーカでニホンジカに警戒を促すことができたのは、スピーカから約120mまでであった。

クマの人的被害と国産ジビエ認証の必要性

○押田 敏雄¹・上 蘭 薫²

(麻布大学¹・静岡県立農林環境専門職大学²)

現行の「国産ジビエ認証」の範囲は狭く、その対象はシカとイノシシのみです。国産ジビエ認証を取得した施設から出荷されたジビエには認証マークを掲示・表示でき、安心安全な食肉となります。日本国内でも野生鳥獣による農業被害が問題視されていますが四つ足動物ではシカとイノシシによるものが話題の中心です。しかし、近年、クマによる被害、特に人的被害例が増え、2024年(4～11月:速報値)の事故数は78件、被害人数は81名、亡くなった方も3名にも上りました。クマ肉をジビエ対象とする場合、食中毒などの心配が多分にあります。ジビエの生食や肉以外の部分の喫食はE型肝炎、腸管出血性大腸菌症、寄生虫症などの感染リスクがあるので避けることが肝要です。今後もクマ肉が俎上に上がる機会が増えると思われるので、シカやイノシシ同様の安心安全を担保するためにも認証が必要であり、その検討を行うことを提案したい。

個体群動態指標としての長期ロードキルデータの有効性 —タヌキを事例として—

○荒井 菜花¹・浅利 裕伸¹・柳川 久¹

(帯広畜産大学¹)

道路は物資や人の輸送などの機能を有し、人間生活に欠かせないインフラである一方、多くの野生動物がロードキルによって死亡している。近年では、ロードキルの発生状況が記録されたロードキルデータを個体群動態の指標として用いる研究が行なわれている。ロードキルデータが個体群動態の指標として有効であれば、従来よりもコストを抑え長期的な個体群動態推定が可能になる。そこで、本研究では北海道の国道における27年間のタヌキのロードキルデータを用い、①ロードキルデータは個体群動態の指標として有効か、②北海道におけるタヌキの個体数の現状の二点について検証、考察を行った。解析の結果、タヌキのロードキル件数は個体数を反映している可能性が示唆され、簡易的な個体群動態の指標として有効な手法であると考えられた。また、北海道全域においてタヌキの個体数は増加傾向にあることが示された。

エゾシカのロードキル対策における DX 活用とオープンデータ化の可能性

○佐藤 金八¹・佐藤 真人¹・大井 元揮¹・鹿野 たか嶺¹

(一般社団法人 北海道開発技術センター¹)

北海道ではエゾシカのロードキルが増加し、社会問題となっており、効率的かつ効果的な対策が求められている。本論文では、北海道開発技術センターが公開する「エゾシカロードキルマップ」を紹介する。このWebマップは、過去の事故データを可視化し、ロードキルの発生状況を視覚的に把握することを目的としており、これにより、交通安全の向上や効果的な対策の計画支援、研究の促進が期待される。また、ロードキルの記録手法をデジタル化するシステムを構築することで、道路管理者の負担を軽減するとともに、データの精度向上やリアルタイムでの情報共有、事故発生傾向の分析が可能となる。さらに、収集したデータをオープンデータ化することで、行政や民間企業、研究機関との連携を促進し、新たなサービスや解決策の創出が期待される。この取り組みを通じて、交通安全と環境保全を両立させ、持続可能な社会の実現を目指している。

視線追跡技術を用いた運転中のドライバーの視点から推測される ロードキルの発生メカニズムについて

○立木 靖之¹

(酪農学園大学¹)

本研究は増加傾向にある野生動物のロードキルの発生メカニズムを、ドライバーの視点を基に分析した。対象とした野生動物はエゾシカ (*Cervus nippon yezoensis*) である。Eye mark recorder (EMR-10) を用い、被験者 4 名が実際に車を運転して道路周辺のエゾシカを発見するまでの推移や、発見した後の操作等に要する時間を検証した。その結果、被験者はシカの存在に「気づき」、「注視」するまでに 0.8 ± 0.6 秒で反応できるが、その前のシカの「出現」から「気づき」までには状況によってばらつきが多く、最大 11.2 秒を要することもあった。また、「気づき」までに時間がかかる要因としては背景の色や景色、他の地物との見間違えが、薄暮時や夜間に発生しやすいことも示唆された。以上の結果から、「出現」から「気づき」までの時間を短縮させる工夫が、ロードキルの減少に重要であると言えた。

パネル展示

●株式会社日本パーツセンター札幌支店

動物侵入対策立入防止柵

鹿、キツネ、狸等が外部から道路等に侵入し、道路や鉄道を通行する車両との衝突を防止するための立入防止柵です。

アーク放電を利用したクズ防草システム

静電防草ネットは、道路、鉄道などのインフラにおける、つる性慢性雑草(クズ・ヤブガラシ)の影響による経済損失改善と防災面の強化を目的として開発中の製品です。

●株式会社ハイク

IoT 自動撮影カメラと AI 搭載クラウド

IoT 自動撮影カメラハイクカムで撮影した静止画・動画をクラウドへアップロードし動物の種判別をクラウド上で AI が行うハイクワークスの紹介

●株式会社赤城商会

害獣侵入防止装置「わたれません」、「わたれません LIGHT」

道路ほか開口部からのシカ・イノシシ侵入対策用グレーチング(テキサスゲート)。

「わたれません」大型車輛が通行可能。(下部 U 字溝あり)

「わたれません LIGHT」は総重量が 6t 程度の車輛が通行可能。

「わたれません LIGHT」は設置が簡単で、移動も可能な仕様となっております。

●釧路根室みち学習検討会・根室ワーキング

認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム

釧路開発建設部道路計画課

“ロードキルの学習”による根室地域学習の取り組み

—だれにとっても、安全安心な根室の道を目指して—

北海道全体、なかでも釧路・根室地域はかねてよりエゾシカと自動車の“ロードキル”が課題となっている。根室ワーキングでは、より望ましい自然共生のあり方を“道路”から学ぶことは北海道の地域学習として普遍的な価値があると考え、令和 4(2022)年度から学習プログラムづくりに取り組んできた。本展示ではその活動を紹介する。

(「みち学習プロジェクト」は、北海道の魅力・個性を幅広く学ぶ「ほっかいどう学」の取組のひとつ。教育機関と北海道開発局等が連携し、全道で小中高等学校生を対象とした学習支援を行っている。)

●ハーテック・バイオセクター株式会社

ヒトデ由来マリン・サポニン採用！シカ忌避テープ DeerBlock

「Deer Block」忌避テープは、ヒトデ由来の「マリン・サポニン」の紫外線発光を活用し、シカの視覚特性に働きかけ移動をコントロールする革新的な製品です。シカの警戒心を刺激し、農作物や果樹園を保護。農業・林業・自治体の鳥獣被害対策に最適な

「Deer Block」をぜひご体感ください！

展示パネルで仕組みや効果を詳しく解説し、導入事例をご紹介します。

●長野県上伊那農業高等学校

シン6次産業

長野県上伊那農業高校では有害獣として捕獲された鹿を有効活用し、地域での捕獲が永続的に行われるお手伝いができるように活動しています。高校では全国で唯一、食肉処理業・食肉販売業・食肉製品製造業の営業許可を取得しました。必要な施設は、高校生自らが実験室の一部を改修工事して整えました。施設の整備から、鹿肉製品の製造・販売まで、すべて農業高校生が行っていることから、「シン6次産業」と呼んでいます。

●「野生生物と社会」学会

野生生物と人との問題解決のための「野生生物と社会」学会の紹介
～会報誌「ワイルドライフ・フォーラム」（「野生動物と交通」特集号）無料配布～

「野生生物と社会」学会は、学際的な学術研究だけでなく実践的な知見や議論の成果を学界や社会に広く示すことを役割としています。会員は学会誌「野生生物と社会」（電子ジャーナル）への投稿と論文掲載、ならびに学会が主催する大会等において研究発表できるほか、野生生物と社会に関するニュースや解説・意見を広範囲に掲載した会報誌「ワイルドライフ・フォーラム」を受け取ることができます（ぜひ見本誌をご覧ください！）。また、新たに会報誌に特化した「フォーラム誌会員」ができましたので、団体や部局での入会がしやすくなりました。学生・行政・企業の方もぜひご入会ください。

●一般社団法人シーニックバイウェイ支援センター

シーニックバイウェイ北海道の活動紹介

秀逸な道やシーニックデッキ&シーニックカフェなど

シーニックバイウェイ北海道の活動をご紹介します。

北海道エゾシカロードキルマップ[®](仮称)のご紹介

- ◆ 北海道エゾシカロードキルマップは、北海道内で発生するエゾシカとの衝突事故（ロードキル）の状況を視覚的に示すマップです。
- ◆ このマップでは、年増加傾向にあるエゾシカのロードキル（野生生物と車両等の交通事故）の状況を周知することを目的として、国土交通省北海道開発局より提供されたデータを基に（一社）北海道開発技術センターが作成しています。
- ◆ スマートフォンからもアクセス可能なため、外出先でもリアルタイムで最新情報を確認できます。QRコードを読み取るだけで簡単にアクセスできますので、ぜひご利用ください。



SCAN
ME!
»



<https://www.wildlife-traffic.jp/roadkill>

Hokkaido Development Engineering Center



野生動物との衝突・回避についてのアンケートを行っております。
野生生物と交通 WEB サイトでもお答えいただけます。

<https://questant.jp/q/wt-enquete>

